



大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 6

ALPHAPOLIS

さとう
Satou

アルファライト文庫 

ウェルシュドラ

ドラゴンロードの
伝説の「烈炎龍」。
温泉好きが高じて、宿を
経営しているのだが……

シエラ

イタズラ好きな神話
七龍のお姉さん。
アシュトを優しく
見守る。

ローレライ

ドラゴンロード王国の
お姫様。現在は妹と
一緒に緑龍の村で
暮らす。

クララベル

元気いっぱいな、
ローレライの妹。
姉とアシュトの
ことが大好き。

ライカ

アシュトに保護された
ダークエルフの女性。
弓の腕は超一流。

フウゴ

何事にもまっすぐな
ダークエルフの少年で、
ライカの弟。

エルミナ

希少種族ハイエルフの
美少女。どう見ても
大のお酒好き。

アシュト

本作の主人公。
魔法適性が「不植物」だった
ために家を追放され、
魔境オーバーシュタインの
領主となる。

主な登場人物

CHARACTERS

第一章 春の七草鶏がらスープ

「フレキくん、久しぶりに、一緒に薬草採取に行こうか」
「はいっ!!」

ある日、俺はワーウルフ族の少年フレキくんを誘い、薬草採取に出かけることにした。

村で必要な薬の材料は俺とフレキくんですべて育てている。この村では農作業による怪我が塗る軟膏や、飲みすぎによる二日酔いを抑える薬、そして腹痛薬の使用が最も多い。

最近、薬院で薬の調合が勉強しかしていないので、気分転換を兼ねて薬草を探しに行くことにしたのだ。

「あの、何を探しに行くんですか？」

「そうだなあ……あ、そうだ!!」

俺は本棚から一冊の古い本を取り出し、ペラペラとページをめくる。

これはハイエルフの薬草本で、薬草の説明以外にも調合法や、薬膳料理などのレシピも載っている。意外に役立つので、薬院の本棚に置いてあるのだ。ヒマな時はけっこう読んでる。

「えーと……あ、あった。見てくれ」
 「は、はい」

とある項目を指さし、フレキくんにも本を突き付ける。

「ええと……春の、七草？」

「ああ。春になるとハイエルフたちは、三日三晩かけてお祭りをを行うそうだ。でも、お祭りが終わったあと、みんなハメを外しすぎてお腹を壊したり寝込んだりする人が多かった。そこでハイエルフたちは体調を整えるために、春に自生する七つの薬草を使った薬膳スープを作って飲むらしい」

「へえ……あ、そっか!!」

「ああ。新年会、結婚式と豪華な料理が続いたから、俺たちで春の七草を集めて、胃もたれ気味の村人たちに薬膳スープを振舞おう!!」

「おおおっ!! さすがです師匠!! 師匠サイコー!!」

「あ、ああ。ありがとう」

最近、フレキくんのテンションが高いなだよなあ。まあガチガチだった最初の頃よりはいいと思うけどね。こっちが素のフレキくんなんだろう。

「でも、どうやって探します? 七つとなると探すのも大変ですし、村人に振舞うなら、けっこうな量が必要ですけど」

「探すのは俺の『探索』を使うから大丈夫。量も、ウッドに増やしてもらえばいい」
 「なるほど!!」

魔法適性が『植物』の俺は、周囲を探索する『探索』の魔法を使っても、植物しか探知できない。でも、今回のように探しものが植物である場合にはかなり役に立つ。

植物を増やすなら植木人のウッドに任せればいい。葉を食べたらどんな植物でも複製できさるからな。

「さて、準備して行こう。まずは、村の誰かに護衛を頼まないとな」

「はい!!」

久しぶりに、のんびりと大自然を満喫しますか。



「叔父貴、お供させていただきます」

「うっす!! お供させていただきますやっす!!」

「ど、どうも」

デーモンオーガの皆さんは狩りで不在だったので、サラマンダー族若頭のグラッドさんと、舎弟頭のバオブウさんが同行してくれることになった。

グラッドさんはお馴染みだが、バオブウさんと行動するのは初めてかも。

ちなみに舎弟頭っていうのは、子分たちのリーダー？ よくわからんがそういう格付けがあるらしい。他のサラマンダー族や近縁種族のリザード族にも、同じ風習があるそうだ。

グラッドさんは既婚だが、バオブウさんは独身のサラマンダー族。二人を見分けるコツは右腕に刻まれた三本の引っかけ傷だ。昔、グラッドさんに挑んで付いた傷なのだから。

歩いている途中、あることに気が付いた。グラッドさんとバオブウさんの腕に、バンダナのようなものが巻かれている。

「あの、それは……？」

おずおずと指さして聞くと、グラッドさんが答える。

「これは、魔犬族のお嬢さんたちが編んでくれたバンダナです。キングシープの耐火繊維で編まれ、オレらの名前が刺繍してあるっす。それと、地位も」

「あ、ほんとだ」

グラッドさんのバンダナには『サラマンダー族若頭・グラッド』という刺繍が入っている。腕に巻くことで名前がはっきりわかった。

バオブウさんは感極まっていた。

「お嬢さんがたには感謝ですわ……オレらのために、こんな」

「そ、そうですか……」

たぶん、見分けるための目印だと思うけど……余計なことは言わなくていいや。

「師匠、そろそろ行きましよう!!」

フレキくんが元気に言った。

「うん。じゃあグラッドさん、バオブウさん、よろしくお願いします」

「へい、叔父貴!!」

さて、人間と人狼、サラマンダーの薬草採取といきますか。



森に入り、さつそく『探索』を使う。

目標は、春の七草。ええと、薬草の名前……シエリ、ニヤズナ、ロクギョウ、ハコヘラ、カミノザ、ベルナ、スズクロ……よし、こい。

俺を中心に魔力の波が広がり、頭の中に対象となる薬草がヒットする。

「よし。マップはそのまま……行こう、みんな!!」

「はいっ!!」

「うっす!!!」

まず、サンプルとなる七草を俺が採取する。

どれも雑草にしか見えないが、これも立派な葉草だ。荒れた胃や疲れた腸に優しく吸収され、お腹に「お疲れ様、また頑張ってるね」と言ってくれる。

「これが春の七草。この辺りにけっこう生えているみたいだから、手分けして採取しよう。バオブウさんとフレキくんはあっち、俺とグラッドさんはこっちで」

「はい!!」

「うっす!! では若先生、よろしくお願いしやす!!」

「わ、わかせんせい……は、はいっ!!」

バオブウさんの言葉にちよつと照れているフレキくんは、サンブルの七草を持って森の奥へ。あまり離れないように指示したけど、バオブウさんがいるから大丈夫かな。

俺とグラッドさんも、七草の捜索を開始する。

「じゃあ、行きますか」

「へい、叔父貴」

ぶっちゃけ、サンブルの分があればウッドに増やしてもらえるけど、せつかく森に入ったんだから葉草採取を楽しみたい。

グラッドさんと一緒に、森を散策する。

「叔父貴、こいつは……」

「あ、それはカミノザです。七草の一つですよ」

「おお、ではこのキノコは？」

「キノコ？ うーん……ちよつとわからないですね。キノコはやめておきましょう」

「へい」

サラマンダー族のグラッドさんと葉草採取するなんて新鮮だ。

最初は怖かったけど、こうして話すとめっちゃいい人だ。俺を「叔父貴」って呼ぶのは未だに慣れないけどね。

それから、三時間ほど経過。

「師匠、ししよー!! いっぱい採れましたよ!!」

「おお、さすがだね」

フレキくとバオブウさんは、たくさんの七草を採ってきてくれた。

バオブウさんは器用に籠を七つ持ち、その中に別々の七草を入れている。俺とグラッドさんの分を合わせるとけっこうな量だ。

あとは帰って薬膳スープを作るだけ。さっそく持って帰ろう!!

「あと叔父貴、こいつも獲ったんですが……」

バオブウさんは、首が切断されたニワトリを十羽ほど持っていた。

話を聞くと、小さいけど猛猛な肉食のニワトリらしく、フレキくんを背後から襲おうと狙っていたのだとか。それでバオブウさんに首チョンパされたというわけだ。

「血抜きは済んでいます。そのまま食えますが……」

「あ、せっかくだからそれも料理に使いましょ。確か、この本に……」

『緑龍の知識書』ではなく、ハイエルフのレシピ本を開く。そこには葉膳スープのアレンジスープのレシピとして、七草の鶏がらスープというのがある。

作り方は簡単、鶏がらスープに七草を入れるだけ。

本当は塩味にしようと思っていたんだけど、このニワトリは使えそうだ。

「じゃ、帰ってみんなで調理しましょか!!」

いつも料理を作ってくれている銀猫族たちには、ここ最近ずっと頑張ってもらっていたからな。今回くらいは俺が頑張らないと!!



さて、村の中央にやってきた。

グラッドさんとバオブウさんに巨大な竈を準備してもらい、エルダードワーフのラードパンさんの工房から巨大な鍋をいくつか持ってきた。

鍋に水を入れて竈にかけ沸騰させ、手先が器用なグラッドさんが下処理したニワトリを放り込む。本来なら一晩以上煮込んだほうがいいが、一時間もしないうちにスープの色が

黄色くなってきた。

このニワトリすごいな。匂いもいいし、鶏がらスープはこれでいい。

あとは、七草を放り込んで完成。鍋をのぞき込むと、すつこく濃厚な鶏がらスープと、七草の香りが鼻を刺激する。

「おお……いい匂い」

「この肉食ニワトリは通常のニワトリと違い、出汁が出やすく肉もすぐ柔らかくなります。生でもいけますが、調理するともっと美味いんですぜ」

「詳しいですねグラッドさん……」

見た目は血の滴る生肉を齧るイメージなのに、意外にも料理通だった。あとは味を確認してみよう。

「じゃ、俺が味見するよ」

そう言って、深皿にスープと七草をよそう。うん、色も綺麗だし、七草の香りもいい。ではさつそく、スープと七草を一口。

「——おおお、染み渡るうう……うんまい」

濃厚な鶏がらスープ。葉草の味もするが、それもまたいい。

清涼感のある風味が、濃厚なスープにマッチしてる……うん、美味しい。

「美味い!! じゃあフレキくんたちも」

「は、はい!!」

「ゴチになりやす!!」

フレキくん、グラッドさん、バオブウさんも七草スープを飲む。

「……お、美味しい!! なんだこれ、すっごい濃厚だけど飲みやすい!!」

「う、うめえ……くうう、染みるぜえ」

「はあ……生き返る」

みんなほっこりしている。

すると、いつの間にか銀猫族やハイエルフたちが集まってきた。

銀猫族のオードリーが言う。

「ご主人様、料理でしたら私たちをお呼びいただければ……」

「いや、これは俺が作りたかったんだ。みんな!! これは七草っていう薬草を使って作った、新年会や結婚式で飲みすぎたり、食べすぎたりした身体に優しく吸収される、栄養満点のスープだ!! 飲み終わって手の空いた人は、働いている人たちに声をかけて、交代で飲んでくれ!!」

スープを配ると、みんなほっこりしながら飲んでいった。

銀猫たちも、少し恐縮していたが美味しそうに啜っている。

たまには、こんな炊き出しみたいなのもいだろう。

「師匠、今日はすっごく勉強になりました!! 今度里帰りしたら作ってみますね!!」

フレキくんも満足そうだ。今日の野外授業は大成功かな!!

第二章 シエラ様的一天

アシユトたちの住む緑龍の村には、川が流れている。

以前はそこで洗濯をしていたが、今はその用途ではあまり使われていない。洗濯は川の水ではなく、風呂の残り湯ですることになっている。水を使うのは仕上げ洗いの時だけなので、わざわざ川に出向くことはなくなったのである。

最近では、ハイエルフのエルミナが川釣りをしたり、川の近くに建てられた東屋で龍人のローレイが読書をしたりする光景がよく見られた。

だが、今日は違った。

「〜♪」

長いエメラルドグリーン髪の毛をなびかせ、川の中央にある大きな岩に腰掛ける女性。彼女は素足を水に沈めて鼻歌を口ずさんでいた。

彼女の名前は、シエラこと緑龍ムルシエラゴ。

シエラは、この世界の誰よりも強く、誰よりも自由だ。世界を創りだした神話七龍の一体。『緑』を司る偉大な存在。神出鬼没のお姉さん。肩書きはいろいろある。

シエラは大きな伸びをして——咳いた。

「さあ、アシュトくんのところに遊びに行こっ」
川の水から足を抜き、そのまま歩きました……どういうわけか、彼女は水の上を歩いていた。

シエラが歩くと、流れる川に波紋が浮かぶ。

ぴよんぴよんと川を渡り川岸に着地すると、地面から枝が伸び、シエラの足を包む……
たちまち枝はサンダルになった。

シエラは、くるりと回る。

太陽がまぶしく、柔らかな風が吹き、緑の匂いが鼻孔をくすぐる。

「ふふ、天気もいいし、少しお散歩してからにしようかしら？」

シエラは微笑をたたえながら歩きました。



シエラがのんびり歩いていると、釣り道具を持ったエルミナと出会った。住人のミュデイとシェリーもいる。

ミュデイは、シエラに向かって頭を下げる。

「こんにちは、シエラ様」

「やつほり みんな、釣りに行くのかな？」

「ええ。最近、川釣りにハマっちゃってね。ミュデイとシェリーもやってみたいって言うから、私が教えてあげるのよ!!」

元気に答えるエルミナに対し、シェリーが横から言う。

「いや嘘。エルミナが一人じゃつまらないって言うから、あたしとミュデイが付き合っ
てあげてるんです」

「別にどっちでもいいでしょ!!」

シエラはクスクス笑い、ミュデイに手を差し出した。

「ふふ、お姉さんがおやつあげちゃう。はいこれ」

「わわっ」

シエラの手には、蔦で編んだバスケットが現れた。

中には様々な果物が入っている。ご丁寧に、ナイフまで入っていた。

手先が器用なミュデイなら、綺麗にカットできるだろう。

「わあ、シエラ様、ありがとうございます」

「ふふ♪ みんな、仲良くね」

「えー？ シエラも行きましょうよ」

くいくい、とシエラの手を引つ張るエルミナ。

「ごめんね。お姉さん、アシウトくんのところに行くのよ」

「そうなんですか……あ、シエラ様。お兄ちゃんなら薬院で読書していましたよ」

「ありがと、シエリーちゃん♪」

エルミナたちは、楽しそうに川釣りへ向かった。

シエラは、三人の背中を見守る。

「ふふ……仲良しっていいわねえ」

再び歩きだし、図書館の前へ。

正面の扉が開き、中からローレライと、その妹のクララベルが出てきた。

ローレライは眉を吊り上げ、クララベルはしょんぼりしている。

何かあったのかな？ とシエラが首を傾げると、クララベルと目が合った。

「あ、シエラ様!! シエラ様、助けてえ……」

「こら、クララベル。シエラ様に頼んでも駄目よ」

「うろう」

「あらあら？ ローレライちゃん、どうしたのかしら？」

ローレライは頭を押さえ、ため息を吐いた。

「実は……この子つてば、勉強から逃げ出そうとして、本棚に躓いちゃったんです。それで大量の本が津波のように崩れて、中が滅茶苦茶に」

「うろう……姉さま、ごめんなさい」

「まったく。この件はお母様に報告しますからね」

「えええっ!?!」

「あらあら」

絶望するクララベルと、厳しい表情のローレライ。

優しいだけではない、叱るべき時はきちんと叱るのがローレライだ。

ここにアシウトがいたら、きっとクララベルを甘やかすだろう。

クララベルのために思い、シエラも余計なことを言わない。

「クララベルちゃん、中に戻ってちゃ〜んとお片付けしようね？ そうすればローレライちゃんも許してくれるわ」

「……ほんと？」

「ええ。そのあとは、美味しいおやつが待ってるわよ？」

「ほんと!?!」

「……シエラ様」

「ふふ♪ これくらいならいいでしょ？」

ローレイは目を輝かせるクララベルを見てため息を吐いたが、否定はしなかった。やっぱり、可愛い妹には甘い。

ローレイはクララベルを連れて、再び図書館へ。

片付けをしたあとは、姉妹仲良くおやつの時間だろう。

「うふふ。家族っていいわねえ♪」

シエラにとつて、この世界や大地全てが家族のようなものだ。

彼女は、のんびり歩きます。向かうのはアシウトのいる薬院。

途中、神樹ユグドラシルの元へ立ち寄った。

そこにいたのは、アシウトのことが大好きな植物たち。

「まんどれーいく」

「あるらうねー」

「くーん」

「ムムム……エイッ!!」

薬草幼女のマンドレイクとアルラウネ、ウッドとフェンリルのシロは、しゃがみこんで何かをやっていた。

シエラはこっそり近付き、何をしているのかと覗き込む。

彼女たちは地面に円を描いて、ドングリを並べて弾き合っていた。どうやら、ドングリをぶつけ、円の外に押し出す遊びらしい。

ウッドの弾いたドングリが、マンドレイクのドングリを円の外に出した。

「まんどれーいく!?!」

「ヤッタ!! ウッド、カッタ!!」

「わんわんっ」

だがそこに、シロが前足で弾いたドングリにより、ウッドのものも飛ばされる。さらに、勢いが強すぎたのか、シロのドングリも円の外へ。

「あるらうねー!!」

「……まんどれーいく」

「ウウ、マケター……」

「くううん」

今回の勝負はアルラウネの勝利。そして、すぐに二回戦が始まった。

そこに、ユグドラシルからハイピクシーのフィルハモニカとベルメリアが降りてきた。

「あ、楽しそう!! わたしも交せてー!!」

「わたしもやりたーい」

ハイピクシーの二人も交ざり、『ドングリ弾き』はさらに熱中した。邪魔しては悪いと思ひ、シエラはその場をあとにした。

今日も、緑龍の村は平和だ。

住人たちには笑顔があふれ、全員が生き生きとしている。

シエラはそれが嬉しく、この村を作ったアシュトに感謝した。

そして——薬院に到着。

こっそり侵入し、読書に没頭するアシュトに近付き……そと、耳に息を吹きかけた。

「うおおおっ!？」

「ばあ〜ト お姉さん登場〜ト」

「し、シエラ様!? もう、毎度毎度、驚かせないでくださいよ!!」

アシュトは顔を赤くして抗議。だが、シエラは笑みを浮かべて言った。

「アシュトくん、お姉さんと遊ばっかト」

こうして緑龍の村の日々は穏やかに過ぎていく……



第三章 アセナちゃんの変身事情

「あれ、アセナちゃん？」

ある日、一人で村の中を散歩していると、キョロキョロしながら歩くワーウルフ族のアセナちゃんと遭遇した。彼女はフレキくんの妹だ。

アセナちゃんは、村の外れに向かい、村と森の境界線になっている柵を乗り越えてしまった。おいおい、さすがにこれは不味いぞ。一人で森に行ったら何があるかわからない。俺は迷わずあとを追いかける。

幸い、すぐ近くにアセナちゃんはいた。

「アセナちゃん!!」

「ひゃっ!! あ……」

「こら、一人で外に出ちゃ危ないぞ」

「あうう……」

アセナちゃんはシュンとしてしまった。でも、注意する時は厳しくしないとね。

もう怒っていないことを伝えるため、俺はアセナちゃんの頭をなでなでする。フレキく

んが里帰りしている間はけっこう、こういう風にスキンシップを取っていたから抵抗はされない。

「どうして一人で外へ？ 出かける時は最低三人以上ってルールがあるのは知ってるでしょ?」

「ううう……ごめんなさい」

一応、住人のルールだ。もちろん例外もあるが。

外には危険な魔獣も多いし、一人で出かけることは避けるべきだ。まあ、住人たちはみんな強いから、魔獣の一匹くらいなら問題ない場合が多いけど。

さて、今はアセナちゃんだ。

彼女はおぼろげと話した。

「あの、実は……変身の練習をしようと思って」

「変身って、人狼への?」

「はい……村にいますと、ミアアやライラに見つかってしまいますから。この村に来てけっこう経ちますが、未だに耳と尻尾しか変身できないので……」

「あ……なるほど」

アセナちゃんはワーウルフ族だが、完全な人狼に変身できない。

一応耳と尻尾だけ変身できるものの、それだとぶっちゃけ獣人と変わらない。まあ、そ

それはそれで可愛いんだけど、本人はそれじゃダメだと思っている。まあ、当然だよな。
アセナちゃんは、フレキくと二人暮らした。

掃除や洗濯、食事の支度などは、全てアセナちゃんが一人でやっている。一度だけ仕事
ぶりを見るために銀猫を派遣したが、家事はまったく問題ないようだ。

家事が終わると、銀猫少女のミアちゃんと魔犬族のライラちゃんが遊びに来る。

そこでは獣人の二人に合わせ、オオカミ耳と尻尾を出すようだが、やはり完全な変身を
したらしい。フレキくん曰く、耳と尻尾だけの変身なんて器用なマネ、逆にワーウルフ
族の村では誰もできないそうなんだけど。

「私、やっぱり人狼になりたいです。ミアアやライラは『わたしたちとお揃い』って言っ
てくれるんですけどね……」

「そっか。それで、森で訓練を？」

「はい。練習しているところは見られたくないですし……それに、いい場所も見つけれ
ない」

「そうなのか……でも、一人で森に入るのはダメだよ？ フレキくんは知ってるの？」

「……………」

あちゃー、こりゃ知らないっぽいな。

アセナちゃんの気持ちもわかるけど、見た以上は言わせてもらおう。

「とにかく、一人で森に入るのはダメ。いいね？」

「はう……じゃあ、じゃあ!! 村長と一緒に来てください!! お願いします!!」

「え?」

「その、もう少し、もう少しで……なにか掴めそうなんです」

「……………うーん」

「お願いします!!」

こんなに必死なアセナちゃん、初めてだ。

冬の間は俺の家で預かっていたから、話す機会はいくらでもあった。というか毎日顔を
合わせていたし、かなり打ち解けていると思う。

この子、頑張り屋なんだよなあ……やれやれ、仕方ない。

「わかった。じゃあ、今度から森に入る時は俺に声をかけること。いいね?」

「はいっ!! ありがとうございます!!」

ひたむきに努力するアセナちゃんの頼み、断れないな。



「いいです」

「へえ、こんな場所が」
「えへへ、秘密基地です」

アセナちゃんに案内されて来たのは、村から五分ほど歩いた場所にある大木の根元だった。

「この上で練習しています」

「この上って……樹の上？」

「はい!!」

大きな樹には蔦が伸びており、アセナちゃんはそれを掴むとスルスルと上に登ってしまつた……って、マジ？ 俺も登るのか？

いや、登るしかない。高さは八メートルくらいだしね。

……いやいや、普通に高いわ……ちよつと怖い。

「うっし!!」

弱気をかけ声で振り払い、登っていく。

蔦は掴みやすく、木の幹にも足をかけるところがあつたので、俺の力でも登ることができた。それに樹の上には、枝と枝に床板がかかつており、足場がある。しかもけっこう広い。

「ドワーフさんから使わない床板をもらつて敷いたんです」

「ほお……すごいね、アセナちゃん」

「えへへ。秘密基地なので内緒にしてくださいね」

「わかつた」

「では、始めます……」

俺は端に移動し、アセナちゃんを見守る。

アセナちゃんはオオカミ耳と尻尾を出した……うん、やつぱり可愛い。

ミュアちゃんよりも大きい耳に、ライラちゃんよりモフモフした尻尾。特にあのモフモフ尻尾はヤバイ。冬の間、アセナちゃんが泊まりに来ていた時、シェリーがベッドに引き込んでモフりまくってたからな。

「があううう……っ!!」

おお、アセナちゃんがブルブルしている……どうやらさらに変身しようと力を込めているみたいだ。

でも、まったく変化がない。顔が真っ赤になつたくらいだ。

「ぶああ……うう、駄目です」

「……あのさ、変身ってどうやるの？」

「え？」

「いや、ちよつと気になって」

「ええと、兄さんは『眠い時に寝る、お腹が減ったら食べる、おしっこしたくなったらする、変身したいなら変身する、つまりそういうこと』って言っていました」
「フレキくん……」

もつとちゃんと教えてあげなよ……まあ、実際そういうことなのか。

つまり生理的欲求と同じだ。腹が減ったらメシを食うというくらい、当たり前のこと。その当たり前が、アセナちゃんはできない。

しばらく考え、俺は口を開いた。

「アセナちゃん、ちよつとやり方を変えてみる？」

「え？」

「そうだな。耳と尻尾をしまつて、こつちに来て」

「は、はい」

その場に座り、アセナちゃんも俺の隣に座らせる。

そして、よしよしと頭を撫でた。

「あ、あの？」

「いいから、ほら、クッキー食べる？」

懐にあつたクッキーの袋を差し出す。

「い、いただきます……あむ」

「美味しい？」

「はい。これ、すつごくおいしいです」

「でしょ？ ミュデイが作ったフェアリーシロップのクッキーなんだ。試作品でまだ誰も食べてないんだって」

「へえ……あむ。おいしい!!」

「よかった。いっぱいあるから食べていいよ」

「はい!!」

「よしよし。アセナちゃんは可愛いねえ。よしよし」

「えへへ……気持ちいいです」

「ふふ、じゃあちよつと変身してくれる？ 耳を触りたいんだ」

「はい。あむ……どうぞ」

「うん、ありがとう」

アセナちゃんは、完璧な人狼に変身した。

「へ？」

「ほら、できた」

「……うそ」

アセナちゃんはわなわなと自分の手足を確認した。どこからどう見ても人狼だ。

ふさふさの毛に覆われた身体、オオカミ耳と尻尾、顔もオオカミになっている。五指からは鋭い爪が生えている。以前見たフレキくんの変身姿と同じ、完全な人狼形態だ。

「な、なんで……」

「たぶん、アセナちゃんは『人狼になりたい!!』って思いが強すぎたんだよ。『寝たい!!』って思ってもなかなか寝られないでしょ？ 眠いなら目を閉じるだけでいい。つまり、気負わないで自然にすることが一番だったんだよ」

「わ、私、いつも変身する時は力を込めて……」

「きつと、それがよくなかったんだ。リラックスリラックス、息を吸って吐くように、だよ」

「がううう……そんちよおおう」

「おっと、よしよし」

アセナちゃんは感極まったのか、俺に抱きついてワンワン泣いてしまった。

もつふもふの尻尾を触り、ふわふわのオオカミ耳をこれでもかと堪能させていただきます……うん、やわっこい。

「アセナちゃん、人間に戻ってごらん」

「がうう……」

「ほら、戻れた。変身は？」

「がううう……うう」

今度は耳と尻尾しか変身できなかった。どうやらまだ完全に変身を会得したわけではないらしい。

「う〜ん、まだ練習が必要だね」

「はい。でも……変身できるってわかりました!! もっと頑張ります!!」

「うん。頑張ろう」

でも、いつかきつと、自由に変身できるようになるだろう。

第四章 シェリーの訓練

「お兄ちゃん、訓練に付き合って」

ある日、薬院に来た妹のシェリーがそんなことを言った。

いつも薬院にはフレキくんもいるが、今日はお休み。アセナちゃんと一緒に変身の練習をしに行っている。

なお、以前アセナちゃんが俺の前で変身したことはフレキくんには話していない。秘密

にしてほしいとアセナちゃんに言われたからだ。お兄ちゃんを驚かせたい気持ちがあるんだろうね。

さて、シエリーの話に戻ろう。

「訓練？ なんの訓練だ？」

「決まってるじゃん。魔法の訓練だよ。あたし、鈍らないように鍛錬は続けているの。リュウ兄がいた時は付き合ってくれたんだけど、今はいないし。やっぱり誰かと一緒に訓練したほうが効率いいのよ」

「魔法の訓練ねえ……どんなのだ？」

「リュウ兄がいた頃は実戦形式の訓練とか、新技の開発とかしてたなあ」

「新技……氷の？」

「もちろん」

そういえば、シエリーってビッグバロック王国じゃ超エリート魔法師だったな。才能だけならリュウドガ兄さん以上で、王国精鋭魔法部隊の首席隊長を務めていたとか。

可愛い妹の頼みだ。断るわけにはいかんだろう。

「わかった、いいぞ」

「やった!! ありがとうー!!」

さて、やってきたのは川の近くにある広場。龍騎士の宿舎とドラゴンの厩舎がある辺り

で、龍騎士たちが剣の訓練をしているのが見える。

俺とシエリーが近付くと、騎士たちは訓練を中断してピシッと敬礼した。

邪魔しちゃ悪いので、挨拶を返しつつ広場の隅っこへ。

「で、どうするんだ？ 木剣なら龍騎士たちから借りられそうだけど、組み手でもするのか？」

「あのね、リュウ兄みたいな魔法剣士ならともかく、あたしは後方支援がメインなの。それに普通、魔法師は武器なんて使わないし」

「ふーん」

「ふーん……って、お兄ちゃんも授業で習ったでしょ？」

「必要な知識だから忘れた」

「まったく……」

俺の知識は薬草や農耕、製薬に特化しているからな。戦いはしません!!

さて、俺は何をすればいいんだろう。

「お兄ちゃんには『的』を出してほしいの。動く的とか、大きな的とか。あたしがそれを打ち落とすわ」

「わかった。的ね……」

「魔法の光玉とかでもいいよ」

「ああ」
魔力を固めて球体にするのは難しくない。魔法を覚えたての子供でもできる。今の俺なら、いくらでも球を生み出せるが……

「せっかくだし、シエリーが苦戦するくらい目的を出してやるよ」

「え？」

さて、ここを出したるは『緑龍の知識書』だ。

シエリーの訓練にピッタリの魔法を思い浮かべながら、ぺらっと本をめくる。

『植物魔法・応用』

○ふわふわ綿毛兵士

ふわふわの綿毛は宙を舞い、地面に落ちると戦う兵士に!!

そんなに強くないから訓練相手にピッタリかもね♪

うーん、ふわふわって可愛い表現だ。よくわからんが、これでいいのかな？

「シエリー、的があればいいんだよな」

「うん。なんかいい魔法があったの？」

「ああ。面白そうなのがな。お前さえよければ使うけど」

「いいわね、じゃんじゃんやつて!!」

「わかった」

俺は杖を抜き、呪文を詠唱する。

「ふわふわワタツコ宙を舞い、地面に落ちてさあ実れ!! 『ふわふわ綿毛兵士』!!」

なんだこの呪文……

すると、俺の杖の先から種が一粒ポロッと落ちた。種は地面に埋まって芽を出し、ニョ

キニョキと成長する。

「……なんだこれ」

「お兄ちゃん、また変なの出した……」

「い、いや、これでいいはず」

不思議な植物だった。細い一本の茎に、花ではなくふわふわした綿毛のようなものがいつ

ぱい付いている。

それを怪訝に思っていると……

「おわっ!？」

「うきやつ!? な、なにこれ?」

綿がポンッと破裂し、丸い綿毛がふわふわ舞う。

それは不規則に動き、まるで意志を持っているように見えた。

「そうか、これが目的か!! シェリー、訓練開始だ!!」

「よおーし!!」

シェリーは杖を構え、杖先から氷の礫を発射して綿毛を打ち落とす。

最初こそ順調だったが、いくつかの綿毛がふわ〜と揺らいで礫を躲し始めた。

「このっ、動くなっ!!」

「がんばれよー」

俺は綿毛の本体の近くに座って眺める。

シェリーの魔法を久しぶりに見たけど、やっぱり魔力のコントロールが上手い。才能だけじゃなく、努力も重ねた魔法だ。

「ん? あ、シェリー、後ろ!!」

「やっば!! ああっ……」

残念、打ち漏らした綿毛の一つが地面に落下……え?

「お、おいシェリー!!」

「え?」

地面に落ちた綿毛が根を出し、地面の養分を吸って成長した。

そして身長一メートルちよいの、根っここの怪物になった!!

『キッキーツ!!』

「うわキツモ!? お兄ちゃん、なにこれ!?!」

「えーっと……『緑龍の知識書』によると、綿毛が地面に落ちると大地の養分を吸って成長して『ふわふわソルジャー』になるみたいだ。でも、強さは大したことないっさ」

「えええっ!? うわっひゃ!?!」

『キッキーツ!!』

根っここの怪物ごとふわふわソルジャーは、シェリーに向かって突進する。だがシェリー

はジャンプして回避した。さすが、魔法師とはいえ体術もなかなかだ。

「シェリー、綿毛を打ち落とさないで、ふわふわソルジャーはどんどん増えるぞ!!」

「こんのっ、ああもうっ!! でも、いい、かも、ねっ!!」

シェリーは綿毛を打ち落としながら、落下して成長したふわふわソルジャーも水漬けに

していく。

上を見れば綿毛が舞い、下を見ればふわふわソルジャーがシェリーを襲う。

同時の対処はなかなか大変なようだが、シェリーは汗を掻きながらなんとか処理して

いった。

「お、終わりか」

やがて綿毛が全て飛び、茎だけになった。これ、訓練にはいいかも。シエリーは汗だくで地面に寝転がる。

「ぶっは、つかれ、たあ……、まりよ、く、きれ、たあ……」
「お疲れ、どうだった？」

「ふあ……うん、いい訓練になったわ。もう汗だくよ」

「はは。じゃあ、風呂でも入るか」

「そうね。汗流したいわー」

シエリーを立たせ、土汚れをボンボンと払う。

と、いつの間にか近くに龍騎士たちがやってきていた。

龍騎士の部隊長が前に出て話しかけてくる。

「アシユト様、今のは……？」

「え、ああ。訓練用の植物です。シエリーの相手にちょうどいいかなって」

「おお!! よろしければ、ぜひ龍騎士団にもお貸しいただきたい!!」

「は、はあ。いいですよ」

龍騎士団の部隊長は敬礼し、他の団員もそれに倣った。

とりあえずいくつか出して、俺とシエリーは風呂へ向かう。

あとで聞いた話だが、このふわふわソルジャーは龍騎士たちのいい訓練相手になったとか。

立ち読みサンプル はここまで

第五章 兄と妹

緑龍の村で働く文官ディアーナは、執務室で書類の整理をしていた。

「ふう……」
誰もいない執務室で、小さくため息を吐く。あまりの仕事量にやや気疲れしてしまったのだ。

緑龍の村は様々な種族と取引をしている。ハイエルフとはブドウ、マーメイド族とは魚エルダードワーフとは鉱石、魔界都市ベルゼブとは食料品や嗜好品など。最初の頃に比べると取引相手も品目も格段に増えた。彼女はそれら全てを管理しているのだった。

さらに、緑龍の村で作られたものをそれぞれの種族たちに卸し、代金をベルゼブの通貨である『ベルゼ通貨』に両替し、住民たちに配る。その仕事も、ディアーナ率いる悪魔族の文官たちが取り仕切っていた。なお、これは余談だが、ディアーナ自身はデヴィル族の近縁種にして希少種族の闇悪魔族である。

彼女の上司は村長のアシユトだが、彼は薬師としての仕事がメインで、あまり村の財務には関わらない。もちろん、アシユトがディアーナを信頼しており、そういった方面のこ